京都大学言語学懇話会
2013 年度 活動報告

例会報告

第 91 回例会

日時・場所　2013 年 4 月 13 日 (土) 13:30–16:45 於文学部新館第一講義室

研究発表　「タイ・ルー語数量名詞句内の語順について」

富田　愛佳 (京都大学)

「閉鎖子音の音声的特徴—アジア諸言語の音声分析より—」

清水　克正 (名古屋学院大学)

第 92 回例会

日時・場所　2013 年 7 月 13 日 (土) 13:30–16:45 於文学部新館第一講義室

研究発表　「宮古語池間方言の情報構造表示システム」

林　由華 (日本学術振興会／大阪大学)

「数の一致をめぐる言語差をどう見るか？」

定延　利之 (神戸大学)

第 93 回例会

日時・場所　2013 年 12 月 14 日 (土) 13:30–16:45 於文学部新館第一講義室

研究発表　「失われた *i*-語幹—パーリ語 *piṭṭhi-*「背中」について—」

Adam Catt (京都大学)

「ドム語の動詞「d- “to say” の多義と構文をめぐつて」

千田　俊太郎 (京都大學)

タイ・ルー語数量名詞句内の語順について

富田　愛佳

タイ・ルー語は中国雲南省のほか、ミャンマー、タイ、ラオスなどに分布する南西タイ諸語の一つである。本発表で対象としたのは雲南省西双版納傣族自治州景洪市で話される方言である。発表では、数量名詞句の標準的な語順について概観した後、語りのテクストに現れる非標準的な語順の報告と、その語順が許容される要因の仮説を提示した。

タイ・ルー語の名詞句内では修飾部は被修飾部に後置される。修飾部には名詞句のほか、動詞句も標識なしに現れる。数量名詞句とは、名詞を主要部とし、修飾部に数詞を含むような句である。数詞が名詞を修飾するには通常、類別詞が必要であり、数詞, 名詞, 類別詞の語順は数詞が 1 か 2 以上かによって「名詞(N) 類別詞(Cl) 数詞(Num)」(数詞 1 の場合),「N Num Cl」(数詞 2 以上の場合) のようになる。類別詞の中には、同形で名詞として使用されるものがあり、類別詞の出自は名詞と推察できる。また類別詞は、自らが主要部となり指示詞, 動詞, 関係節などに先行して名詞句を作る用法も持つため、性質は名詞的である。

名詞を修飾する際、類別詞を介して数詞は名詞を後方から修飾する。しかし一方で数詞が名詞を直接前方から修飾する例もある。先行研究でも、人間名詞の場合にこのような語順が許されると指摘されているが、発表者の調査では、時に一般事物の名詞であっても「Num Cl N」という非標準的語順が許容されることがある。この語順は、数詞が 1 の場合には漢語とも異なるため、単純な漢語の影響とも考えにくい。

非標準的語順が許容される要因として、同形で名詞としても使われる類別詞の存在が名詞句構造の解釈を不明確にさせることと、人間名詞に限定的な「Num N」という例外的語順の存在を考えている。数詞の直後の名詞が類別詞として再解釈され、数詞が名詞に前置される例外的な語順が一般事物にまで拡張されたという仮説である。今後は多くの例を集め、仮説を検討していく。

(とみた　あいか)

閉鎖子音の音声的特徴
ーアジア諸言語の音声分析よりー

清水克正

閉鎖子音は、諸言語の音声の中で基本的な単位と考えられており、それらの音声的特徴についての研究はかなり以前から行われている。一般に子音の分類は、調音点、調音法および発声タイプ（有声性・無声性）を基準にして行われ、これらに関する特徴は、フォルマント・パターン、音響エネルギーの集中領域および隣接音への影響などに現れることが知られている。このうち、発声タイプについては、アジア諸言語ではかなり異なっており、本発表では韓国語、中国語（北京語）およびタイ語の特徴と共に、これらの母語話者が第２、第３外国語として英語および日本語を学ぶ場合の特徴について考察した。

閉鎖子音の発声タイプについて、その弁別要因にはいくつかあるが、その中でよく取り上げられる特徴は声帯振動の開始時間(voice onset time, VOT)である。VOT は、閉鎖の解放から声帯の振動開始までの時間を示し、破裂を基準に３つの主要領域に分けられている。アジア諸言語の発声タイプは、その範疇数により２～４つにグループ化され、VOT を中心に広く調べられている。調査の対象としている３つの言語について、中国語は有気音・無気音の二範疇であり、韓国語は濃音、平音および激音、タイ語は有声、無声無気および無声出気の三範疇の言語である。これらの言語の語頭における VOT 値を測定してみると、各言語の発声タイプの範疇は VOT により弁別され、主要範疇が破裂前、破裂直後および破裂後の時間尺度の上にあることが明らかになった。さらに、一般に調音点の VOT 値への影響について、奥よりになるに従って VOT 値が増大することが知られているが、それぞれの言語における両唇音と歯茎音の間ではこうした現象は見られず、調音点の影響については、これら二つは当てはまらないことが明らかになった。

次に、これらの言語を母語とする話者が英語、日本語を学ぶ場合に母語の範疇が如何に影響するかを検討した。これらの話者は、英語を第二外国語(L2)、日本語を第三外国語(L3)として学んでおり、それぞれの言語の発声タイプは二範疇である。韓国語話者は母語の平音を英語/p/,日本語/p,t,k/の無声音に対応させているが、英語・日本語の有声音に対しての対応関係は少なく、母語では見られない破裂前振動を一部で示した。また、中国語話者は、母語の無気音・有気音をそれぞれ英語・日本語の有声音・無声音に対応させているが、日本語の無声音に対しては母語より短縮化した VOT 値でもって発音していた。さらに、タイ語話者は母語の無声出気音を英語・日本語の無声音に、また母語の有声音を L2, L3 の有声音に対応させているが、母語に存在しない有声軟口蓋音/g/に対しては、母語の有声音とは異なる破裂後振動で対応させていた。これらの考察より、L2、L3 の発声タイプの学習には、VOT 値の近似性による同化移入が考えられるが、こうしたパターンにあてはまらないケースもあることが明らかになった。

こうした分析結果の考察に基づき、VOT 値は発声タイプの弁別に有意に関与し、また外国語を L2,L3 として学ぶ場合は、母国語と外国語の VOT 値の近似性による同化移入が見られるが、それ以外のパターンも存在すると言える。

（しみずかつまさ）

宮古語池間方言の情報構造表示システム

林　由華

池間方言を含む琉球諸語には全般的に、焦点標識と呼ばれる形態素があり、また日本語同様、専ら主題標識とされる標識も持っている。池間方言の焦点標識は du、主題標識に対応するのは a（ここでは非焦点標識と呼ぶ）であり、述語も含めた文中の様々な要素に付く。さらに、池間方言には gyaa という専ら対格に後接して用いられる a とは別の非焦点標識がある（他の宮古語諸方言における ba に対応する）。このように、池間方言は、日本語と比べて情報構造に関連した形態素を多く持っているといえる。その一方で、本発表では、述語部分についてはこの焦点標識 du や非焦点標識 a などによるマーキングのほか、動詞の各活用形などの述語の形によっても、とりうる情報構造が変わってくることを示した。(1) (2) はその例である（例文中の ( ) 内は任意要素、ゴシック体は焦点を表す）。

(1)　kuma=n=na　　taa=ya　　ari/*ai
　　ここ=与格=非焦点　　田=非焦点　　ある
　　「ここには田は**ある**（田のあるなしが問題となっている文脈で）」

(2)　a.　kuma=n=na　　taa=nu(=du)　　ai/*ari
　　ここ=与格=非焦点　　田=主格(=焦点)　　ある
　　「ここには**田が**ある」

　　b.　kuma=n(=du)　　taa=ya　　ai/*ari
　　ここ=与格(=焦点)　　田=非焦点　　ある
　　「**ここに**田はある」

(1) (2) に現れている述語動詞の ari と ai について、ari が述語のみを焦点とする形式であり、ai が動詞述語が焦点に入れない（必ず非焦点となる）形式であるため、述語以前の要素がすべて非焦点形である (1) においては ai が、述語以前に焦点がある (2) においては ari が容認不可能な形となる。また、(2) にも示されているように、du は焦点に付される標識ではあるが、焦点構造に常に必須の要素というわけではない。

本発表では、これらのことを基に、池間方言の情報構造の決定について、

・焦点よりむしろ、非焦点を明示的にマークしなければならないシステムをもつ
・助詞付加だけでなく、述語のタイプが文の情報構造（表示）を決める大きな要因になっている

ということを主張した。

（はやし　ゆか）

数の一致をめぐる言語差をどう見るか？

定延利之

いわゆる「数の一致」は，英語では守るべき正しい規則に見えるが（例"three student*(s)），その一方で，中国語では語句や文を不自然にしてしまう誤った規則に見える（「三箇学生（*們）」）。また，日本語では，守っても守らなくてもいい規則に見える（「三人の学生（たち）」）。

このような各言語の文法の違いを理解し，さらに違いを超えた共通性を捉えようとする時，持ち出されがちな考えが「機能的オーバーキルとその軽減」（Durie 1995）である。この考えに基づけば，英語・中国語・日本語の文法はいずれも，「言語表現の情報伝達機能を確保するために，言語表現の不明確性をオーバーキルしたい（過剰につぶしたい）。複数性を伝達する場合，複数形はなるだけ多くの手段で表したい」「オーバーキルの過剰な負担を軽減したい。余計な複数性表示は無くしたい」という 2 つの相反する動機どうしのせめぎ合いの結果として捉えられる。そして，各言語の文法の違いは，せめぎ合いの結果，優先される動機の違いとして理解される。

このような文法の理解や把握は，確かにもっともらしく見える。しかし，こうした文法の理解や把握は，常に有効と言えるのだろうか？　本発表は，「機能的オーバーキルとその軽減」という考えに基づく文法の理解や把握が常に有効とはかぎらないということを示し，この考えの現象説明力に留保を付けようとしたものである。

より具体的には，本発表は，「数の一致に関して英語と中国語は正反対の位置にある。英語は数の一致を守らなければならない言語であり，中国語は数の一致を守ってはいけない言語である」という観察が実は誤りで，中国語も数の一致を守ることがあるということを指摘した。さらに，中国語は数の一致を気まぐれに守ったり守らなかったりしているわけではなく，日本語と同じように，当該のモノがアニマシーの階層上，高い位置にある場合ほど，数の一致を守りやすいということを示した。そのために本発表では，言語類型論で得られている知見（Croft 1990）に，日本語・中国語に関する筆者の観察を加え，これまで考えられていた以上に豊かなアニマシーの階層を提案した。

数の一致を「言語表現の不明確性をオーバーキルしよう」という話し手の動機から直接説明しようとする案に代わって，最終的に提案されたのは，数の一致を同格構造に由来するものとして説明する案である。この案は，「日本語や英語と違って，中国語では修飾―被修飾構造は，同格構造とははっきり分かれている」という帰結を生む。

最後に示したのは，この帰結が，「日本語でも英語でも「3 時間歩く」ことを「3 時間歩き続ける」と言え，「本を最後まで読む」ことを「本を最後まで読み終わる」と言えるが，中国語では言えない」という別の現象の説明にも役立つということで，「3 時間歩き続ける」「本を最後まで読み終わる」にも同格構造的な側面を認める分析案を提示した。

（さだのぶ　としゆき）

失われた *i*-語幹—パーリ語 *piṭṭhi-*「背中」について—

アダム　キャット（京都大学）

中期インド・アーリア語の一つであるパーリ語には *piṭṭhi-* と *piṭṭha-* という語があり、ともに「背中」という意味があるが、前者は *i*-語幹を示し、後者は *a*-語幹を示す。また、「背中」を意味する同源語に関して、古代イラン語であるアヴェスタ語にもパーリ語と同様の語幹のバリアントが現れる。同じ「背中」を意味するにも関わらず、なぜこの名詞が *i*-語幹と *a*-語幹の両方を示すのかは明らかになっていない。

この問題について、発表者は名詞が *i-* もしく *a-* で終わる現象を印欧祖語までさかのぼる名詞派生パターンの一つと関係づけることで説明を試みる。印欧祖語では、*o*-語幹（インド・イラン語派では、 *o*-語幹 は *a*-語幹として現れる）は形容詞として機能する場合が多く、それに対して *i*-語幹は抽象名詞を形成する。この派生関係は印欧祖語の段階で生産的だったが、数百年の間の言語変化を経て、多くの語派で次第に消えてしまったと考えられている。 *o*-語幹の形容詞から *i*-語幹の抽象名詞を派生するプロセスが生産性を失ったために、通常どちらか一方の語幹しか姉妹言語に保持されていない。それにも関わらず、パーリ語とアヴェスタ語では、「背中」を意味する語は両語幹を保持している。発表者は両言語における二つの語幹の保持の背景に、二つの語幹の互いに異なる機能的・意味的な役割の変化があったことを論じる。

（あだむ　きゃっと）

ドム語の動詞「d- “to say” の多義と構文をめぐつて

千田俊太郎

ドム語はパプア・ニューギニアのシンブー州、グミネ地區とシネシネ地區にわたるドムと呼ばれる一部地域に住む人々の使ふことばである。ドム語の動詞は小さな閉ぢた語類であり、動詞の多くが廣い意味にわたつて使はれる。このことがドム語のドム語的な特徴に繋がつてゐるやうに思はれる。本發表では動詞「*d-*を取り上げ、その基本義「言ふ」及びその他の特徴的な意味と、構文を紹介する。

語根「*d* は動詞、補助動詞、輕動詞、不變化詞と、複數の品詞にわたる用法が見られる。

輕動詞の用法とは「*gl*「*d-*「固い」のやうな複合述語の最終要素となる場合の用法である。この例は述語的意味をもつ非動詞「*gl*「固い」に「*d-*「言ふ」が後續するもので、全體の意味は不變化の「*gl* が決定し、「*d-*は動詞の屈折を擔ふ役割分擔が行なはれる。

「*d-*は、非視覺の知覺刺戟事象であることを示す任意のエヴィデンシャルの標識としてもはたらく。動詞の連用形に後續する補助動詞の用法である。例へば *Vmnan*「*s-*「匂ひがする」に「*d-*が後續した *Vmnan*「*s*「*d-*は話者が今現に匂ひを感じてゐる時に使ふ表現で、この構文では非未來時稱しかとれない。*Vkamn*「*s-*「雨が降る」を *Vkamn*「*s*「*d-*「雨が降る (非視覺知覺)」といふ表現は雨を視覺以外の手段で感知してゐる時に使はれる。ドム語の知覺動詞は *Vkan-*「見る」、*Npl-*「聞く、感じる」の二つのみであり、ドム語においては「知覺」が大きく視覺と非視覺の二つに分けて捉へられてゐるといへる。

引用標識としての=「*d* はほとんどのタイプの引用節に義務的に後續し、「～と考へる」のやうな思考の引用もすることができるが、動詞「*d-*「言ふ」が引用節の直後にある場合、引用標識は必要ではない。このことは動詞「*d-*「言ふ」が引用標識として文法化してきた過程を示唆する。

動詞「*d-*「言ふ」と密接に關聯する構文上の問題に、話法がある。直接話法と間接話法の二つは英語の規範文法などでは綺麗な對立として說明されるが、英語においても他の多くの言語においても二分法は成立しない。ドム語においては呼び掛け句の間接化などの興味深い現象が起こるほか、直示形式を中心とした話法に關はる文法範疇の「直接・間接引用性」特徴が複雜に絡まり合つてをり、その樣相の記述には話法パラメータの共起關係といふ觀點が有用であると考へる。

（ちだ　しゆんたらう）

「京都大学言語学研究」（33 号）の原稿募集について

京都大学言語学研究（33 号）の原稿を募集します。投稿される方は次の執筆要項によりご提出下さい。

執筆要項

1. 提出原稿
   - 原稿種別は以下の通りとする。
     - 研究論文、研究ノート、書評論文、書評
   - 完全原稿を提出すること。
   - 印刷原稿、電子記録媒体（FD,MO,CD-R など）、もしくは電子メールでの投稿を受け付ける。別途用紙もしくは電子ファイルに以下の項目を記載して提出すること。
     - 題目
     - 執筆者名 ふりがな
     - 原稿種別（研究論文、研究ノート、書評論文、書評）
     - ページ数（要旨は含めない）
     - 所属機関
     - 連絡先（郵便番号、住所、電話・FAX 番号、e-mail アドレス）
     - 原稿の分野を表すキーワード（3～5 個）
     - 要旨を英語以外の言語で提出する場合は英文タイトル
   - 電子ファイルで提出する場合は、PDF 形式で提出すること。
   - 提出原稿に特殊なフォントが含まれている場合、当該フォントが埋め込まれている PDF で提出することが望ましい。
   - PDF 以外のファイル形式で提出する場合は編集委員会までご相談下さい。
2. 研究論文
   - **原稿枚数**　原則として、図表などを含め A4 判用紙 30 枚以内とする。これを超える原稿についても投稿を受け付けるが、採用された場合でも、掲載が次号以降になることがある。
   - **文字のサイズ**　日本語論文は明朝体 12 ポイント（1 行 37 字程度）・1 ページ 35 行程度、欧文論文は Times 系 12 ポイント・1 ページ 35 行程度（1.5 スペース程度）とする。
   - **原稿の余白設定等**　各ページのマージンを上下左右: 30、35、30、30mm とる。印刷原稿で提出する場合、ページ番号は印字せず、右下隅に鉛筆で記入する。
   - **タイトルと氏名**　1ページ目のはじめにタイトルと氏名(中央揃え)を入れること。タイトルは 14 ポイント太字とする。なお、タイトルの上部には 2 行分の余白を設け、タイトルと氏名の間に 1 行分、氏名と本文はじまりとの間に 2 行分の余白を設ける。匿名査読制のため、本文中に執筆者の氏名は入れないこと。また、本人が特定できるような表現はできるだけ避けること。

- **注について**　注は通し番号をつけ、各ページの末尾におく。文字サイズは 10 から 11 ポイントとすることが望ましい。
- **要旨**　A4 判用紙 1 枚の要旨を付ける。要旨は本文と異なる言語で書くのが望ましい。原稿のスタイルやタイトルと氏名の体裁については上記に準ずる。要旨文のはじまりの左上部に「要旨」「Abstract」等と太字で表記し、要旨文のはじまりとの間に 1 行分の余白を設けること。
- **採否**　編集委員会で決定し、原稿受付より二ヶ月以内に採否を連絡する。
- **原稿締切日**　原稿は随時受け付ける。ただし受領日によっては、次号以降への掲載となることがある。

3. 研究ノート

原稿枚数は A4 判用紙 20 枚以内とする。体裁、採否、原稿締切日等は研究論文に準ずる。

4. 書評論文

他者の出版物に対する批判的な考察で、独自の提言を含む論文。原稿枚数は A4 判用紙 20 枚以内とする。体裁、採否、原稿締切日等は研究論文に準ずる。

5. 書評

原稿枚数は A4 判用紙 15 枚以内とする。体裁、採否、原稿締切日等は研究論文に準ずる。（ただし要旨は不要。）

6. 連絡先

投稿は下記住所にて受け付けます。

〒606-8501　京都市左京区吉田本町
京都大学大学院文学研究科言語学研究室
電話/ Fax: (075) 753-2827
電子メール: kulr.editor@gmail.com
（編集委員会のメールアドレスが変わりましたので、ご注意下さい。）

7. その他

- 原稿及び電子記録媒体は原則として返却いたしません。
- LaTeX で執筆する場合は、上記の書式に合わせたスタイルファイルを用意していますので、編集委員まで御連絡下さい。
- 執筆者には、掲載号 1 部と掲載論文の電子ファイルを進呈いたします。抜刷を希望する方には実費にて作成いたします。
- 第 33 号は、2014 年 12 月発行を予定しています。
- 京都大学言語学研究室は、掲載原稿を電子的な手段で公開・配布する権利を有するものとします。
- 同一筆頭著者による複数の投稿は、以下の場合を除いて認められません。

  複数投稿が可能な組み合わせ：

  {研究論文・研究ノート・書評論文} のいずれか 1 本と書評 1 本